

「保育・教職実践演習（幼）」における主体的な学びの効果⑤  
－新履修カルテにおける保育者に必要な資質・能力の自己評価に着目して－

渡 部 努  
横 田 典 子  
滝 沢 ほだか  
平 尾 憲 嗣  
山 田 悠 莉

研究紀要第 54 号 抜粋

岡崎女子大学  
岡崎女子短期大学

令和 3 年 3 月 15 日発行

## 【研究論文】

# 「保育・教職実践演習（幼）」における主体的な学びの効果⑤ — 新履修カルテにおける保育者に必要な資質・能力の自己評価に着目して —

渡部 努\* 横田 典子\* 滝沢 ほだか\* 平尾 憲嗣\* 山田 悠莉\*

## 要 旨

「教職実践演習」は、“全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるもの”とされており、本学の「保育・教職実践演習（幼）」においては、保育・幼児教育に関する学びの確認と学科行事である幼児教育祭に向けた実践的な学びを織り交ぜた授業内容を展開している。また、文部科学省は、教職実践演習の実施にあたっての留意事項として、学生のこれまでの教職課程の履修履歴を把握し、それを踏まえた指導を行うことを示し、履修カルテの活用を推奨している。本学では、令和元年度からの教育課程編成の変更に伴い、学習の記録（履修カルテ）を改変した。本研究では、学びの軌跡の集大成として位置付けられている「保育・教職実践演習（幼）」の授業が新履修カルテにおける保育者に必要な資質・能力に対して、学びの効果が得られているかを検証することを目的とし、調査を行った。その結果、保育者に必要な資質・能力の6つのカテゴリーの全てにおいて、自己評価が高くなることが明らかになった。

キーワード：保育・教職実践演習、履修カルテ、保育者に必要な資質・能力、自己評価

## I. はじめに

地域の幼児教育を支えるため、有能な保育者を輩出していくことが、保育者養成校である本学の使命であり、社会貢献に繋がると考える。「保育・教職実践演習（幼）（以下本授業と記載）」は、教育課程編成において、段階的な学びの最終に位置付けられ、学修の総まとめとしての役割を担っている。本授業の実施においては、「学生のこれまでの教職課程の履修履歴を把握し、それを踏まえた指導を行うことにより、不足した知識や技能等を補うものとする」と（教職課程認定申請の手引き 平成32年度開設用）<sup>①</sup>が求められている。さらに、学びの中で高められた人間力、専門力、地域貢献力を基に、保育者としての資質、能力を現場で活かすことのできる実践力へと結び付けていくことが、本授業の目的であると考える。

本授業における教授内容について、授業担当者は現在に至るまでに、学修の質の向上を目的とし、教員として求められる4つの事項(1.使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 2.社会性や対人関係能力に関する事項 3.幼児児童生徒理解や学級経営等

に関する事項 4.教科・保育内容等の指導力に関する事項)を踏まえ、協同学習の効果、主体的な学びの効果について検証、研究を継続的に行ってきた。一方で、令和元年度には新しい教育課程に沿って教育課程編成の変更が行われたため、学修の質の保証という観点から、教授内容が適正であるかどうかについて、改めて検証を行う必要がある。

教育課程編成の変更に伴い、本学におけるポートフォリオの中核として使用する「学修の記録（履修カルテ）」（以下、履修カルテと記載）の内容を改変した。詳しくは、ディプロマポリシーと関連付けられた授業科目と、教育体系との関係を明示し、併せて、教育体系を「大学における学びの基礎」「豊かな感性と教養」「教育・保育についての理解」「子どもについての理解」「乳幼児教育・保育の知識・技術」「保育実践」の6つのカテゴリーに分類し、そのカテゴリー毎に関連する28項目の、「保育者に必要な資質・能力の項目と内容」を示した。「保育者に必要な資質・能力の項目と内容」とディプロマポリシーについて、学生がセメスター毎に5件法での自己評価を行い、各自の学びを振り返り、今後の学修に向けた課題や目標を明確にするための、学修における

\*岡崎女子短期大学

PDCA サイクルの確立を促している。

本研究では、改変された履修カルテに示されている「保育者に必要な資質・能力」の項目と内容を用いて、学生の自己評価をもとに、本授業を通して、学生が保育者としての資質・能力について、どのように習得しているか、学びの効果を明らかにすることを目的とする。

## II. 授業概要

令和元年度の「保育・教職実践演習（幼）」の授業では、幼児教育学科第一部2年生4クラス、幼児教育学科第三部3年生2クラスの卒業学年6クラスを7名の教員でチームティーチングを行った。担当教員は、毎回授業後（週に1度）、授業内容の振り返りと学生の様子の共有、次回の課題や指導方法の打ち合わせや確認を行っている。令和元年度の授業内容を以下の表1に示す。第1回から5回までは、これまで学修してきた内容の復習として、不足している知識を補うための講義形式の授業を中心に行った。第6回以降は、本学が学びの成果発表として位置付けている学科行事である「幼児教育祭」に向けて、実践的な活動をクラス単位で行っていく。学生たちはこれまでの学びを生かし、保育の指導法を具体的に、実践的に学ぶことができる内容となっている。また、毎時の授業ではPDCA サイクルを意識できるように、振り返りを記録にまとめるように指導している。以上のような内容を学生が主体的に学べるように配慮し、授業内容を構成した。今年度の授業内容については、昨年度の授業担当者間での振り返りを基に構成し、変更点としては、後半の活動をよりスムーズに展開できるように、説明、企画発表の配置に工夫をしたこと、また「子育て支援」の視点を深めるために、前半の学習内容の見直しを行った。

表1. 令和元年度 保育教職実践演習（幼） 授業内容

回数	内容
1	オリエンテーション、これからの幼児教育とは（三法令の改定（訂）からの学び）、履修カルテの記入
2	幼児教育祭についての説明、全体の計画を考える 保育内容と方法 ①「学級経営案・園の安全計画」 ②「指導計画・小学校との連携」

3	付属幼稚園 園長講話（保育者の役割・専門性について）、グループ討議・発表（幼児教育祭に向けて）
4	付属幼稚園見学 （配属クラスの学級経営案に基づいてクラス経営について学ぶ）
5	グループ討議 （幼児教育祭に向けたクラス活動、企画発表、活動場所の決定）
6-12	保育指導法を学ぶ （授業成果発表〔幼児教育祭〕に向けて）
13	指導法の実践研究 （付属幼稚園を招いてのリハーサル）
14,15	幼児教育祭1日目、2日目
16	授業の振り返り・目指す保育者像

第1回の授業では、授業のオリエンテーションを行い、シラバスを基に授業の目的や目標、授業計画について説明を行った。特に、本授業がこれまでの学びの軌跡の集大成であることを確認した上で、自己の課題を把握し、保育者としての学びを総仕上げするための科目であること、また、卒業後に保育現場で実践を行うために、現時点で自己に不足している力を把握し、補い、4月からの保育者としての生活をスムーズにスタートできることを目的としていることについて丁寧に解説を行った。併せて、学びの振り返りとして、「これからの幼児教育とは（3法令の改定（訂）からの学び）」についての講義を聞き、平成30年に施行された三法令について、講義形式で再度確認をする時間を設けた。授業の終わりには、これまで継続してまとめてきた「履修カルテ」の記入を行い、設定項目を確認しながら、自らの現時点での課題を自己評価し、不足している資質、能力について確認した上で、授業内で自らが重点的に取り組まねばならない事項について認識できるように促した。

第2回には、本授業の成果発表として位置づけられている「幼児教育祭」について、昨年度の資料を基に説明を行った。幼児教育祭を成果発表として位置づけているのは、例年、地域の子どもたちを招いて、実際に子どもたちと関わることで、保育実践力に磨きをかけることを目的としているからである。そのために、学生たちは制作活動や音楽、身体表現を含む総合的な表現活動を立案、実践することを通して、来場した親子と関わりを持つ。特に今年度からは子育て支援の重

要性について、学生たちがより深く理解できるように、計画段階から、地域の親子の姿を想定し、活動を組み立てていく試みを取り入れた。本授業は、成果発表の出来栄ではなく、当日に至るまでの過程そのものを重視しており、学生が所属するクラスを、保育現場での学級（クラス単位）と仮定し、様々な立場を経験しながらロールプレイとして、実践的に取り組む。その過程を通して、保育者としての使命感や責任感を身に付け、他者との軋轢を経験することで、他者との関わりを学び、直接子どもと触れ合うことで子ども理解や保育内容に対する理解を高めていくことのできる授業構成となっている。活動内容を学生に説明する際には、発表までのプロセスを踏む意義を丁寧に説明し、学生自身が意欲を持ち、より主体的に学びに関わりを持てるように配慮した。後半には、「全体の計画を考える（保育内容と方法について）」として、学級経営案・園の安全計画と指導計画、小学校との連携について講義を行った。講義では、実際に付属幼稚園の学級経営案や月の指導計画を資料として使用した。本時の学びは、付属幼稚園での見学と連携しており、学生には、見学するクラスの月の指導計画の立案を行った。

第3回の授業では、付属幼稚園の園長先生より、「保育者の役割・専門性について」のご講演をいただいた。次回予定している付属幼稚園の見学が、より意義深いものになるように、具体例を織り交ぜながらお話しいただいた。また、最後には、学生からの質疑応答の時間を設けることで、4月から現場で働く学生たちの不安や疑問点を解消するための一助にもなった。講話の後には、成果発表である幼児教育祭にむけて、自らのクラスを学級（クラス）に見立てグループ討議を行った。その際は、前時の講義内容を生かし、学級経営案の立案にも触れ、学生自身が、学びの繋がりを意識しやすいように配慮した。そうすることで、自らのクラスの実態を把握し、抱えている課題や身に付けたい力をより明確に認識することができ、今後のクラス活動への意欲を高め、配慮や留意点について、学生間で共通理解へ繋げることができた。

第4回の授業では、「付属幼稚園見学（担当クラスの学級経営案に基づいて、クラス経営について学ぶ）」とし、保育現場（付属幼稚園）と連携した学びを展開した。第2回の配布した配属クラスの指導計画を参考とし、学級経営案や月の指導計画や日案が、今日の保育にどのように繋がっているのかを踏まえて見学を行うことで、計画の重要性や繋がりを学ぶ機

会となった。また、第2回の授業の際に資料を参考に、自らが立案してみた月の指導計画と、実際の子どもの姿を照らし合わせながら、相違点については修正を行い、保育の指導計画の持つ重要性や意義をより深められるよう指導を行った。

第5回のグループ討議（幼児教育祭に向けてのクラス活動）・企画発表では、クラスのリーダーによるプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、学級経営の視点、子どもたちがどのように楽しむのかといった活動に向けて留意点、子どもたちに伝えたいことについて、当日参加する親子の姿を踏まえ、各クラスが討議した企画をリーダーが中心に発表した。各クラスが課題として捉えている事項を踏まえ、子育て支援の視点を取り入れながら具体的な活動について説明がなされた。また、他クラスの発表を聞くことで、多様な視点を学び、理解を深めた。教員からの質疑応答を経て、幼児教育祭での発表形式とクラスの活動場所を決定した。企画発表はコンペ形式で行われ、教員による評価を行った。活動場所には制限があり、希望通りとはならないクラスもあったが、クラスで立てたねらいを再度、確認した上で、柔軟に企画の変更を行うことができた。

第6回から12回までは、各クラスで設定した「ねらい」を基に具体的な活動を作り上げていく。活動においては、様々な制作物の試作や、準備物の把握、必要な役割分担や、活動計画など、多角的な視点が求められる。それらは、協力が不可欠な取り組みのため、学生一人一人が、集団での自らの役割を強く意識している様子が窺えた。また、決められた予算内で工夫して計画を立てていくことが求められ、廃材の利用等、様々な工夫が求められた。教員は、学生たちの主体性を重視し、学生間で課題を乗り越えていけるように助言を重ねた。時折、活動が行き詰った時には、もう一度学生と一緒に立案した「ねらい」に立ち返り、現在抱えている課題と合わせて、適宜指導を行った。教員はそれぞれの専門性を生かし、異なる活動場所にも携わりながら、協力して指導を進めていった。その際には、教員間で情報共有を徹底することで、各クラスの進捗状況や課題について互いにアドバイスをを行い、連携しながら進めていけるように努力した。順調に進まない時期もあるものの、学生たちは、常に子ども視線を意識し、クラスごとで重点化した課題を克服できるようにロールプレイを繰り返しながら、学びを深め、軋轢や問題に直面した際には、カウンセリングマインドについて

も意識するよう促した。中間発表を行い、クラス間、教員間で進捗状況を共有する機会を設け、テーマや子どもたちに伝えたいこと、具体的な表現内容との相違点について再確認することで、新たな課題や視点の獲得に繋げることができた。これらの活動は、全て学生主体で行われており、学生は、小集団の責任者、調整係、サポート役など、様々な立場を経験することで、集団における自己の果たすべき役割、責任感について学びを深めた。

第13回には、「指導法の実践研究」(リハーサル)として、付属幼稚園児を招き、リハーサルを行った。これまで準備してきた内容が子どもの発達や興味、関心に適しているかどうか、また安全面において課題はないかを実際に確認した。また、今年度から付属幼稚園の教諭より、学生の活動に対して、フィードバックを受ける試みを取り入れた。場所ごとに想定していた子どもの姿と異なる部分もあり、反省点や改善点も多く見られ、そこに付属幼稚園の教諭からの助言をもとに、学生たちは本番に向けてより良いものを目指して、活動を再度確認し修正しようとする前向きな姿が見られた。

第14回、15回の成果発表である幼児教育祭当日は、地域の子どもたちが大勢訪れ、子どもたちと直接活動を行うことで、様々な子どもの反応や表現する姿に寄り添い、共に楽しもうとする学生たちの姿が見られた。その姿勢は、発表時のみならず、誘導や、発表までの待機中にも、子どもに対する様々な配慮がなされていた。また、保護者に対して、声をかけ、安全に楽しく遊んでもらえるようにサポートをしている姿もあり、これまでの授業を通じて身に付けた保育者としての資質「他者に寄り添う優しい気持ち」を自然に実践している様子もあった。また、これまで多くの時間をかけて準備をしてきた成果発表をやり遂げることによって、責任感はもちろん、クラスの仲間から信頼されているという自信や喜び、充実感を得ており、クラス間で互いを尊重することでより仲間同士の絆を深めている様子も窺えた。最終日には、これまでの労を互いに労い、達成感と充実感で涙する姿もあり、ここに至るまでのプロセスを振り返り、これらの経験から感じたことを互いに言葉で伝え合い、感動を共有する姿も見られた。

第16回には、これまへの学びを振り返り、リーダーによるクラスの総括の発表、履修カルテの記入を行った。総括では、初めに立てたねらいをどのように達成していったのか、課題をどう克服していっ

たのか、その成果について共有することができた。履修カルテの記入では、保育現場に出る前に、学生が獲得した学習成果について自己評価を行い、自らの今後の目標や、長所や短所を把握することができた。

### Ⅲ. 調査方法

調査対象は、本授業科目を履修する令和元年度幼児教育学科第一部2年生(171名)、幼児教育学科第三部3年生(66名)とした。そのうち、回答に不備のあったものを除いた229名を分析対象とした。

アンケート調査は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学ポータルシステムのアンケート機能を利用して行い、調査対象者は、web上で回答を行った。アンケート調査を実施するにあたり、調査対象者に対して、回答内容が授業に対する評価と一切の関係がないこと、調査協力に同意した者のみ回答をすること等、調査について丁寧に説明をした。

アンケート調査は、授業内容の観点から①初回授業終了時、②第3回座学終了時、③第5回授業 活動場所決定時、④第8回場所別活動時(1)、⑤第10回場所別活動時(2)、⑥第13回リハーサル終了時、⑦第15回幼児教育祭終了時の7回実施し、5件法で回答を求めた。アンケート項目は変更した履修カルテの全28項目を用いた(表2)。

分析方法は、履修カルテの各質問項目の回答について、「とてもそう思う」を5点から「ほとんどそう思わない」を1点となるように付与し、得点が高いほど、各項目における自己評価としての達成度が高くなるように得点化した。

カテゴリ毎に、回答の平均値を算出して、平均値の変容を調査し、授業内容との関係性を考察する。その後、アンケート調査を行った授業回におけるカテゴリの平均得点の差異を検討するため、一元配置の分散分析を行った。

表 2. アンケート項目

項目	質問内容
<b>大学における学びの基礎</b>	
1	社会人としての素養 挨拶、言葉遣い、服装、態度など、社会人としての基本的なマナーや常識が身に付いている
2	他者との対話 他者の意見やアドバイスを受け止めた上で、協力を得て課題に取り組むことができる
3	他者との連携・協力 集団において、他者と連携・協力して課題に取り組むことができる
4	役割遂行 集団において、率先して自らの役割を見つけ、与えられた役割をきちんと果たすことができる
<b>豊かな感性と教養</b>	
5	基本的人権の理解と意識 基本的人権を理解している
6	社会の急速な変化に対応し得る能力 高度情報化社会の進展に対応する基本的な情報能力を獲得している
7	文化の理解と創造 国内外の文化を理解し、国際化に対応できるコミュニケーション能力を獲得している
<b>教育・保育についての理解</b>	
8	教育・保育職の意義 教育・保育職の使命感を持ち、意義、役割、職務内容、子どもに対する責務を理解している
9	教育・保育の理念・歴史・思想の理解 教育・保育の理念、教育・保育の歴史・思想について理解し、自らの保育観を深めることができる
10	教育・保育の社会的・制度的・経営的理解 教育・保育の社会的・制度的事項を理解し、現代の乳幼児教育・保育の課題を把握している
<b>子どもについての理解</b>	
11	心理・発達の理解 子ども理解に必要な心理学や発達理論の基礎知識を修得している
12	集団形成 仲間集団での活動における目的の共有や、組織の在り方について、基礎理論・知識を修得している
13	状況に応じた対応 個々の子どもの特性や状況に応じて変化するニーズへの対応の方法を理解している
<b>乳幼児教育・保育の知識・技術</b>	
14	保育内容（乳児～就学前） 幼児期に育ってほしい姿を踏まえ、各領域における保育内容について理解している
15	養護と教育の一体性 養護と教育を一体的に行う保育の意義について理解している
16	乳児の保育 乳児保育の知識や基礎的な援助方法について理解している
17	特別な配慮を必要とする子どもの保育 特別支援教育や療育に関する知識や基礎的な援助方法について理解している
18	子育て支援 地域との連携、保護者との相互理解、信頼関係の形成の重要性、子育て支援における制度とその内容について理解している
19	教育要領・保育指針・教育・保育要領 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容を理解している
20	教育課程・全体的な計画に関する基礎理論・知識 教育課程・全体的な計画の内容を理解し、子どもの実態を踏まえた指導計画を作成する基礎理論、知識を修得している
21	情報通信機器の活用 教育・保育に関わる場面での情報通信機器の活用方法を理解している
22	指導法 教育方法・指導法の基礎理論・知識を修得している
<b>保育実践</b>	
23	発達過程に応じた指導 子どもの発達過程を個別的・集団的に考慮して、適切に関わることができる

24	子どもに対する公平で受容的な態度	子どもが言語的・非言語的に表す思いや意見を真摯に受け止め、場面に応じ、公平かつ受容的・応答的な態度で接することができる
25	保育構想力	子どもの発達と保育の基本原則を考慮した活動を構想し、子どもの姿に基づく指導計画や学級経営案を作成することができる
26	教材開発力	子どもの実態や地域の特徴に合わせて教材を作成し、工夫を加えることができる
27	保育展開力	適切な環境を構成し、子どもの反応を受け止めながら、柔軟に保育を展開することができる
28	指導・援助の技術	目の前の子どもに相応しい発問、話し方、表現など、保育者の専門性に基づく基本的な指導・援助ができる

#### IV. 結果と考察

##### 1. 授業内容に伴う保育者に必要な資質・能力の自己評価の変容

カテゴリ毎の平均値の変容を調査した結果を図1に示す。

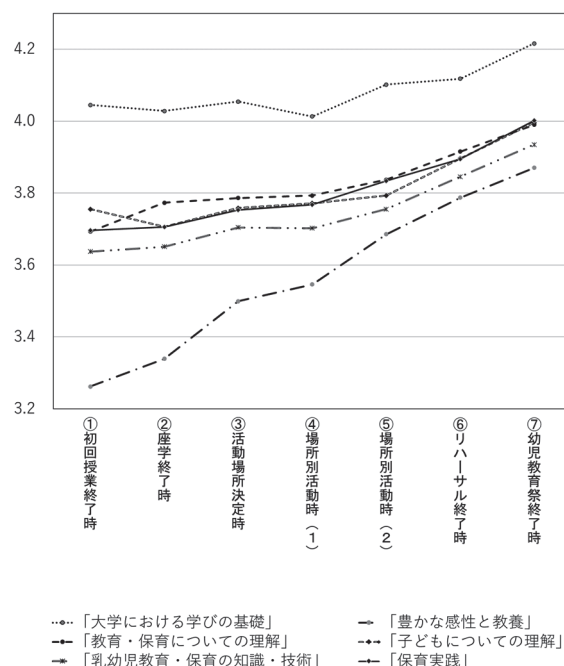


図 1. カテゴリ毎の自己評価の変容

全体としては、いずれのカテゴリにおいても、上昇や下降を繰り返しながらも、⑦幼児教育祭終了時に最高値を記録している。中でも、⑤場所別活動時(2)以降においては、すべての項目で上昇しており、上昇の幅も大きい。このことから、本授業が、学生の「保育者に必要な資質・能力の項目と内容」に対する自信を総合的に高めることに繋がっていたこと、その自信が大きく高まるのは授業後半である

ことが示唆された。

また、①初回終了時には最も低い数値であった、「豊かな感性と教養」については、最も大きく上昇している。「豊かな感性と教養」の項目は、履習カルテでは、教養科目と関係づけられている項目であるが、幼児教育祭が地域の親子に向けた子育て支援の場であることから、地域の親子の現状や保育者に求められるニーズ等を調査し、家庭環境の違いや様々な状況の親子に対する支援や配慮を検討していく中で、この項目に対する自信を高めたのではないだろうか。同じく教養科目と関連づけられている「大学における学びの基礎」も、②座学終了時と④場所別活動時(1)に若干の下降が見られたものの、⑦幼児教育祭終了時に最高値となっている。こちらについても、成果発表を地域社会に向けて行うことで、社会人としての振る舞いや他者との会話、連携、自分の役割を意識することに繋がり、2日間務め上げたという結果から自信を高めた可能性が考えられる。本授業が専門科目だけではなく、教養科目における学びにも大きく繋がっていることが示唆できる結果であったと言える。

専門科目と関連づけられている「教育・保育についての理解」、「子どもについての理解」、「乳幼児教育・保育の知識・技術」、「保育実践」の結果の中で特徴的な点としては、②座学終了時に「教育・保育についての理解」が大きく数値を伸ばしているのに対し、「子どもについての理解」の数値が下降していることが挙げられる。第II章で述べたように、本授業は前半に座学を中心とした内容を実施している。このことから、「教育・保育職の意義」や「教育・保育の理念」、「歴史・思想の理解」、「社会的・制度的・経営的理解」は座学を中心とした知識理解の復習を通して、自信を高めたものの、子どもに対する「心理的・発達の理解」や「集団形成」に対する理解、「状況に応じた対応」等の部分において、自信を無くしている様子が窺える。座学での学びの課題ともいえるかもしれない。しかし、これら「子ども理解」の項目については、その後は若干上昇したのち停滞状態になるものの、⑥リハーサル終了時、⑦幼児教育祭終了時には大きく数値を高めている。これら2回の調査は、実際に子ども達の前で成果を発表した後である。このことから、座学によって自信を無くしていた「子どもについての理解」が、子ども達に向けて準備してきたことが子ども達に受け入れられたという実感を持って高まったのかもしれない。そして、②座学

終了時で数値を下げている点から推測すると、それはおそらく初回終了時の「子どもについての理解」から更に深い理解に対する自信なのではないだろうか。

また、「乳幼児教育・保育の知識・技術」、「保育実践」については、授業回数を高める毎に緩やかに上昇している。これらの項目については、教育・保育の具体的な知識や技術、そして、それらの知識や技術を生かした子どもたちに向けての具体的な実践に対する自信である。これらの項目が緩やかに上昇していることは、座学での学びを経た後に、成果発表に向けてロールプレイングをしながら実践的に学ぶという本授業全体の流れが、学生が常にそれらの事項を意識し、考えることを繰り返すことによって自信を高めることのできる授業内容であることを示唆するものではないだろうか。

## 2. 授業内容に伴う保育者に必要な資質・能力の自己評価の差異

本学の改変された履修カルテの保育者に必要な資質・能力に対する自己評価が本授業の内容に応じて、どのように変容するかについての分析を深めるため、各アンケート実施回を独立変数、6カテゴリーにおける自己評価を従属変数とし、一元配置の分散分析を行った。

その結果、「大学における学びの基礎」(F(6, 1368) = 8.07 p<.001)、「豊かな感性と教養」(F(6, 1368) = 65.60 p<.001)、「教育・保育についての理解」(F(6, 1368) = 16.13 p<.001)、「子どもについての理解」(F(6, 1368) = 16.16 p<.001)、「乳幼児教育・保育の知識・技術」(F(6, 1368) = 25.54 p<.001)、「保育実践」(F(6, 1368) = 21.58 p<.001)の全てのカテゴリーにおいて、.001水準の有意差が認められた。

分散分析の結果、有意差が認められたため、Bonferroni法による多重比較を行い、授業内容に伴う保育者に必要な資質・能力の自己評価の差の検討を行った。カテゴリー毎の結果を表3~表8に示す。

表 3. カテゴリー①「大学における学びの基礎」（項目 1～4）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	16.18	16.11	16.22	16.05	16.41	16.47	16.86	8.07	***
(SD)	(1.88)	(1.74)	(1.89)	(2.04)	(2.17)	(2.47)	(2.44)		
	①<⑦ , ②<⑦ , ③<⑦ , ④<⑦ , ⑤<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

表 4. カテゴリー②「豊かな感性と教養」（項目 5～7）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	9.79	10.02	10.50	10.64	11.06	11.36	11.61	65.60	***
(SD)	(1.86)	(1.76)	(1.73)	(1.64)	(1.57)	(1.83)	(1.75)		
	①<③④⑤⑥⑦ , ②<③④⑤⑥⑦ , ③<⑤⑥⑦ , ④<⑤⑥⑦ , ⑤<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

表 5. カテゴリー③「教育・保育についての理解」（項目 8～10）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	11.08	11.32	11.36	11.38	11.51	11.75	11.97	16.130	***
(SD)	(1.51)	(1.54)	(1.45)	(1.54)	(1.47)	(1.67)	(1.67)		
	①<④⑤⑥⑦ , ②<⑥⑦ , ③<⑥⑦ , ④<⑥⑦ , ⑤<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

表 6. カテゴリー④「子どもについての理解」（項目 11～13）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	11.27	11.12	11.28	11.31	11.38	11.69	11.99	16.162	***
(SD)	(1.30)	(1.56)	(1.48)	(1.56)	(1.65)	(1.73)	1.69		
	①<⑥⑦ , ②<⑥⑦ , ③<⑥⑦ , ④<⑥⑦ , ⑤<⑦ , ⑥<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

表 7. カテゴリー⑤「乳幼児教育・保育の知識・技術」（項目 14～22）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	32.73	32.86	33.34	33.32	33.80	34.61	35.41	25.542	***
(SD)	(4.05)	(4.12)	(4.11)	(4.42)	(4.62)	(4.72)	(4.85)		
	①<⑤⑥⑦ , ②<⑤⑥⑦ , ③<⑥⑦ , ④<⑥⑦ , ⑤<⑦ , ⑥<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001

表 8. カテゴリー⑥「保育実践」（項目 23～28）の多重比較

	①初回 授業後	②座学 終了時	③活動場所 決定時	④場所別活 動時（1）	⑤場所別活 動時（2）	⑥リハーサ ル終了時	⑦幼児教育 祭終了時	F 値	
平均値	22.18	22.23	22.52	22.61	23.00	23.37	24.01	21.580	***
(SD)	(3.14)	(3.38)	(2.79)	(3.32)	(3.26)	(3.47)	(3.57)		
	①<⑤⑥⑦ , ②<⑤⑥⑦ , ③<⑥⑦ , ④<⑥⑦ , ⑤<⑦ , ⑥<⑦								

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* p&lt;.001



「大学における学びの基礎」においては、表3に示す通り、⑦幼児教育祭終了時と①～⑤のアンケートを実施した授業時の自己評価に有意な差が認められた。このカテゴリーはその名の通り、大学における学びの基礎的な部分が含まれているためか、平均値は初回からどのカテゴリーよりも高くなっている。それにも関わらず、⑦幼児教育祭終了時と①～⑤のアンケートを実施した授業時の自己評価との間に有意な差がみられたということは、基礎的な項目であっても、卒業を目前とした学びの集大成としての幼児教育祭を通して、もともと高い自己評価がさらに高まることが示唆されたといえる。このカテゴリーに含まれる社会人としての素養、他者との対話、他者との連携・協力、役割遂行は、授業の中だけでなく、幼児教育祭当日で、地域の子どもたちや保護者と関わる中でより必要な力であるといえる。ここから推察されるのは、幼児教育祭で、基本的なマナーを身に付けたうえで、イレギュラーなことにも臨機応変に対応し、自らの役割を果たしながら、クラスの学生同士で協力し合い、1つのことを成し遂げる学生の姿である。基礎的な項目にも関わらず、集大成としての授業を通して自己評価の高まりが見られたことは、本授業における特色の1つではないだろうか。

「豊かな感性と教養」では、「大学における学びの基礎」とは対象的に、全てのカテゴリーの中で一番自己評価が低い項目である。授業最終回まで、全項目中一番低い値であることに変わりはないが、第IV章1で分析した通り平均値は右肩上がりとなっており、伸び幅が一番大きい項目でもある。多重比較の結果は、表4に示す通り、毎回の授業回で平均値が高まっているため、隣り合った授業回では差が出ないものの、隣り合っていない多くの授業回と有意差が示される結果となった。このカテゴリーは先に示した通り、教養科目と強く結びついているため、集大成である本授業の内容が、これまで学んできた教養に関わることと結びついた結果、自己評価の高まりが見られたことが推察される。第IV章1では平均値の比較から、本授業が専門科目だけではなく、教養科目における学びにも大きく繋がっていることが示唆できると結論づけたが、多重比較の結果も、これを支持するものである。

「教育・保育についての理解」では、表5に示す通り⑦幼児教育祭終了時と①～⑤のアンケートを実施した授業時の自己評価に有意な差が認められた。

また、⑥リハーサル終了時は、①～④の授業時との間に有意な差があり、さらに①初回授業終了時と④⑤の授業時との間にも有意な差が認められた。このカテゴリーには、教育・保育職の意義、理念・歴史・思想の理解、社会的・制度的・経営的理解が含まれている。図1の平均値の推移をみると②～⑥の平均値はほぼ横ばいであるが、具体的な活動に入った⑤場所別活動時(1)以降は、右肩上がりの結果となっている。このカテゴリーに含まれる内容については、授業第1回から第3回の座学を中心とした講義と付属幼稚園での見学においても、学びを深めてきた。特に授業第3回における付属幼稚園園長の講話や、授業第4回の付属幼稚園見学等は、これらのカテゴリーについて関連性が高いため、自己評価が高まること予想されたが、結果として平均値は上がったものの①と授業前半の②や③との間に有意差が見られなかった。これらのことから、座学的な内容からは、本カテゴリーの内容について自己評価の高まりには結びつかないが、これらの知識を前提として場所別活動に入った後、①初回授業終了時と比較して自己評価が高まっていくことが明らかとなった。また、子どもへの責務や保育観の深まり、乳幼児教育・保育の課題等については、場所別活動での演習とロールプレイを通して、より学びが深まり、⑦幼児教育祭当日での実践を通して、教育・保育全般についての理解が深まっているとより強く感じている学生の姿が示唆される結果となった。

「子どもについての理解」では、⑦幼児教育祭終了時と①～⑥のアンケートを実施した授業時との自己評価に有意な差が認められた。また、⑥リハーサル終了時と①～④の授業時との間においても有意な差が認められた。このカテゴリーでは、心理・発達の理解、集団形成、状況に応じた対応が含まれている。⑥リハーサルでは、付属幼稚園児を対象にし、これまでに準備をしてきた劇や遊びの実践を行い、⑦幼児教育祭では、地域の子どもや保護者を対象に実践を行う。授業の中で、子どもの心理・発達の理解を振り返りながら、子どもたちが楽しむことができるように劇を構成したり、体を動かして遊ぶことができる環境を制作したりしてきた。しかし、実際に様々な年齢の子どもと関わることを通して、学生自身が持っていた心理・発達の理解がさらに促され、より現実的な理解に繋がっていくことが推察される。また、様々な年齢や特性を持つ子どもたちと様々な状況の中で関わる中では、その子どもの要求

や思い、ニーズを汲み取り、一人一人に応じた関わりを行うことが求められる。これまでの授業の中で学んできた子どもについての理解が、実際に子どもと関わることでさらに、理解が深まり、実際的な理解になるのではないかと考えられた。

「乳幼児教育・保育の知識・技術」では、①初回授業終了時、②座学終了時と⑤～⑦の授業時との間に有意な差が認められた。また、これまでのカテゴリーと同様に前半の①～④授業と⑥リハーサル終了時、⑦幼児教育祭終了時との間にも有意な差が認められた。このカテゴリーでは、保育内容、養護と教育の一体性、子育て支援、指導法等が含まれている。第1回から第3回の授業では、座学を中心としており、⑤場所別活動時(2)は、劇や遊びの環境が概ね整い、実際の子どもを想定して、細部に至るまで具体的に工夫していく時期である。活動が進むにつれて、構想してきたものが形になり、整ってきたことから、より具体的で詳細に保育や幼児教育について考える機会が増えてくることが推察される。子どもをより意識したことにより、乳幼児教育・保育の知識や技能に対する学びが深まっていると考えられる。

「保育実践」では、「乳幼児教育・保育の知識・技術」と同様の授業間に有意な差が認められた。このカテゴリーでは、発達過程に応じた指導、子どもに対する公平で受容的な態度、保育構想力、指導・援助の技術等が含まれ、実践を通して養われる資質や能力である。そのため、実際に子どもと関わることでできる⑥リハーサル終了時、⑦幼児教育祭終了時において、保育実践に対する自己評価が高まり、実践について詳細且つ具体的に考える⑤場所別活動時(2)でも高まることが推察される。⑤場所別活動時(2)の頃には、中間発表として、他のクラスの学生が子ども役になり、ロールプレイを通して、意見交換をすることも行われることがあるため、その点も結果に反映されたと考えられる。

## V. まとめ

今回の調査から、本学の「保育・教職実践演習（幼）」における授業内容を通して、学生は、履修カルテに示されている保育者に必要な資質・能力に対する自己評価を高めていることが明らかになり、学びの軌跡の集大成として、学びの効果を保障していると考えられる。

各カテゴリーにより、自己評価が変容する様子に

違いは見られるものの、第13回の授業「指導法の実践研究（付属幼稚園を招いてのリハーサル）」、第14・15回の授業「幼児教育祭」にかけて、高まっていくことが分かった。これまで、本授業担当者は、文部科学省が示す「教職実践演習」の到達目標、“幼児期の終わりまでに育って欲しい姿”を見通した指導法の視点から、本授業の学びの効果を検討してきたが、これらの視点においても、付属幼稚園児を対象にしたリハーサルや幼児教育祭での実際の子どもとの関わりを通して、学びの効果が高まることが明らかになっている。実際の子どもと関わる中で、それまで培ってきた様々な学びを実感として得ることができ、結果として、自己評価が高くなることに繋がるのではないかとと思われる。講義や演習を通して得た学びが子どもとの実際の関わりを通して、より深い理解になっていくという学びのプロセスがあることを考えると、講義や演習を中心とする授業と実際に子どもと関わって学ぶことができる実践的な授業を往還的に編成していくことにより、さらに深い学びが得られる可能性があると考えられるため、本授業における改善の視点としていきたい。

本学の履修カルテは、学生個人の学習内容、理解度等を把握する方法として、教育体系をもとに、保育者に必要な資質・能力を6つのカテゴリーとして示す形に改変された。本調査の結果、すべてのカテゴリーについて、「保育・教職実践演習（幼）」の授業を通して、自己評価が高まっていた。「大学における学びの基礎」「豊かな感性と教養」のカテゴリーは、教養科目と関連付けて構成されているが、本授業を通して自己評価が高まっていることは興味深い結果となった。教養科目で得た学びが本授業の活動を通してさらに学びが深まっていることは、保育・幼児教育の学びだけに限らず、他者との協同的な活動の中で、人間力を向上させる学びを得ていると考えられ、この授業内容が持つ特色であるとも考えられる。

本研究は、履修カルテに示されている保育者に必要な資質・能力に着目して、アンケート調査を実施し、量的な検討を行った。今後は学生が本授業のどの場面において、どのような学びを得ているか、具体的な学びの効果を検証するため、質的な検討についても行っていきたい。

## 倫理審査

本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理審査による承認を令和元年10月15日に得て、

施行した（通知番号 48）。

### 執筆分担

本稿の執筆は、I 章を平尾、II 章を山田、III 章を横田、IV 章 1 節を横田、2 節を滝沢、渡部、V 章を渡部が行った。

### 引用文献

- 1) 文部科学省 (2002) 「教職課程認定申請の手引き」、p.191

### 参考等文献

- ・横田典子、渡部努、滝沢ほだか、山田悠莉、野田美樹 (2018) 「教職実践演習における主体的な学びの効果—保育内容の指導力の体得と保育者効力感を観点として—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域共同研究』第 4 号、pp. 69—78
- ・山田悠莉、渡部努、平尾憲嗣 (2019) 「保育・教職実践演習（幼）の主体的な学びの効果②—保育内容の指導法を体得する過程に焦点をあてて—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 52 号、pp.151—160
- ・滝沢ほだか、横田典子、野田美樹 (2019) 「保育・教職実践演習（幼）の主体的な学びの効果③—自修時間と意識の変化の関連から—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 52 号、pp. 111—119
- ・平尾憲嗣、米窪洋介、滝沢ほだか、横田典子、渡部努 (2020) 「保育・教職実践演習（幼）」における主体的な学びの効果④—レジリエンスと学びの意識の変容との関連性について—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第 53 号、pp. 27—34
- ・久米裕紀子、脇田栄、池川正也、宇留嶋美穂、河合摂子、遠藤晶 (2019) 「保育・教職実践演習の授業改善の試み—「にこにこタイム」の振り返り—」『武庫川女子大学 学校教育センター年報』第 4 号、pp. 69—76

### 謝辞

本論文執筆にあたり、授業運営において、野田美樹教授、小原 幹代准教授（岡崎女子短期大学幼児教育学科）、米窪 洋介講師（松本短期大学幼児保育学科）の各氏にご協力をいただきましたことを深くお礼申し上げます。